思想的地滑り

FVI　声なき者の友の輪
陣内俊

「地滑り」とは、降雨や地震などによって傾斜面の一部または全部が傾斜の下側に移動する現象を言うが、中でも台風などによって引き起こされる土砂災害は急峻な斜面の多い日本の宿命的な自然災害である。日本の世間において思想がどのような動きをする傾向にあるのか、ということを、地滑りのアナロジーで語ることは出来ないかというのが本小論考の試みである。

1944 年冬、太平洋戦争末期に、鈴木大拙は「日本的霊性」を上梓した。終戦後に、同書第二刷（1946 年発行）の巻頭で、当時 75 歳の鈴木は軍国主義に染まっていった当時の日本のありさまに触れ、「これというのも、畢竟するに、日本人の世界観及び人世観が深さと広さとを欠いて居たところから発するものである」と書いている。その結果「国学者――科学も哲学も宗教も解し得ない国学者の歴史観を唯一のものと心得させられた。」のである。鈴木は以下のように危機感をあらわにしている。

一たび群衆心理態の流行が確立すると、その弊その毒の波及するところ実に予測を許さない。厳密な批評的・哲学的態度の欠乏や、透徹した独立自主的思索的慣習の不確立なところでは、どうしても一盲衆盲を引くということにならざるを得ない。われらは今後の日本を如何に建設すべきかの問題に当面して、深く思いをこの点に徹すべきであると、自分は考える。

先述のアナロジーに言い換えるならば、鈴木は、「戦前の日本社会に思想的地滑りが起きたが、思想的、哲学的な根が十分に張り巡らされていなかったために、社会はそれを止めることが出来なかった。戦争が終わった今、再び同じことが起きないように問題の所在を見定めていくことが喫緊の課題である。」という危機感を抱いていたと言える。「日本的霊性」は、この問題のひとつの解として提案されたものである。（実際、軍部が推奨していた「日本精神」への対抗を意識して鈴木は「日本的霊性」というタイトルを選んだ。）

ひるがえって現代の日本を見るとき、私たち日本人は相も変わらず群集心理に押し流され、「時代の空気」に支配され、確たる根を持たぬまま漂い続けているかに見える。つまり当時の鈴木のこの危機感を、21 世紀の日本は共有しているのではないか、と私は考える。特に 2011 年の東日本大震災後の日本社会の「空気の変節」は甚だ振幅が大きかった。

バブル崩壊後の「失われた 20 年」を通り過ぎ、停滞が当たり前ではあるが、過去の社会資本蓄積によってそれなりの豊かさを享受していた日本社会は 2011 年に起きた大災害を契機に「目覚めよ」と言われたように感じていた。外圧によってしか変わることの出来ない日本社会と重ね、災害を「21 世紀の黒船」となぞらえた人もいたし、戦後の焦土にも似た東北地方を見て「第二の敗戦」と呼んだ人もいた。様々な見方が出来るものの、戦後最大の国難を前にして大方の世間の意見は「この国は今のままではいけない、変らなければならない」というものではなかっただろうか。

福島第一原子力発電所の事故は、象徴的であった。先の大戦は「石油で始まり石油で終わった」と昭和天皇が言われたように、当時石油の 7 割を米国からの輸入に頼っていた日本は、ABCD 包囲網によって石油の禁輸措置を取られ、「勝ち目のない戦争の開戦に追い込まれた」。その苦い経験のトラウマは戦後「経済成長というパラノイア」という形をとって亡霊のようによみがえった。自国産の一次エネルギーが 10%に満たない日本が、世界唯一の被爆国であるにもかかわらず、原子力政策に舵を切ったことは、このトラウマによるところが大きいのではないだろうか。「効率」を最優先させ、第二次産業のエネルギー効率（貨幣換算による）を上げることで GDP 成長を達成してきた戦後日本経済の在り方の「象徴的存在」が原子力発電所であった。

その原子力発電所の事故が、戦後の日本社会の最大の挫折を誘発したということは、示唆的である。「物質的に豊かになること」は、あるところまでは幸福の必要条件であるかもしれない。しかし、物質的な豊かさが幸福の指標、もしくは必要十分条件であるというすり替えが起きたところから、社会はいびつな方向へ向かい始めたのではないか。その物質的豊かさを担保するものとしての「効率」を至上の善として 20 世紀後半を駆け抜けた先に、原子力発電所の事故が起こった。

被災当時、このような「自国の近代史がおのずから発話しているかのようなメッセージ」を、日本人の多くは聞き取り、それは共有されていたように思う。現に、当時の言説空間で語られていた言葉や、2011 年から 2012 年にかけて出版された書籍タイトルをみると、日本人の根本的価値観を問うようなものや、人としてどう生きるかという根源的な問いに答えるような宗教性の高い内容のものが多い。「絆」という言葉がテレビでは連呼され、一時的ではあるが、騒がしいだけの痙攣的な笑いを引き起こすようなテレビ番組は姿を消した。経済成長に優先する「価値」がもしかしたらあったのに、我々はそれを見落としてきたかのかもしれない、といった自省的な言葉が公にも語られ、そして受け入れられた。

しかし、そのような「モード」は長くは続かなかった。2012 年末に行われた第 46 回衆

議院議員選挙から潮目が変わった。ときの自民党は「日本を、取り戻す。」をキャッチフレーズに、「経済成長」を前面に押し出し、選挙に圧勝した。さらに 2013 年に自民党の安倍晋三首相は「福島原発事故の影響は完全にコントロールされている」と世界にアピールして 2020 年の五輪招致を勝ち取った（この発言内容は当事者である東京電力の発表によって後に否定されている）。そして大方の世論は五輪招致を歓迎し、その理由は「経済効果が期待できる」もしくは「なんとなく明るい気分に浸れる」というようなものであった。

1964 年の東京オリンピックとオーバーラップした人も多かったのではないかと私は思う。あのオリンピックによって日本は「戦災から完全に復興した」ということを世界にアピールした。2020 年のオリンピックで「東日本大震災から完全に復興した」という「気分」を味わいたいという大衆の「集合的無意識」のようなものが、あの熱狂に繋がったのではないだろうか。

2013 年の五輪招致決定以降、先に述べた 2011 年の震災直後に見られた「我々は生き方を見直さなければならない」というような言説はすっかり影をひそめてしまった。もしくは発信しても黙殺されるようになった。「明るい話が聞きたいんだ。暗い話はもう聞きたくない。」という人々の「空気」の現れだろうか。そのような心情自体が悪い、良いなどという価値判断をするつもりはない。しかし、日本の思想界における震災後のこのような変節は「思想的地滑り」の実演に他ならず、もはや思想的土砂災害の予感すらする事態ではないだろうか。鈴木大拙が現代に生きていたら、「批評的態度の欠如」と、「大衆心理への迎合」を、嘆き、天を仰ぐのではないだろうか。

一神教を持たなかった日本にはもともと「超越性」の概念が希薄である。しかし、近代を導入した明治以降、近代的統治を機能させるために国家が神話を作り、超越性を担保した。戦時中に「超越的なるもののために」天皇陛下万歳と言って死んでいった人々のことを思い出せばこの構造が分かる。敗戦によって、この「超越性」は一夜にして棄却された。「現人神」は「人」になったのである。墨塗りの教科書はその象徴である。この時代にキリスト教に入信した人が多かったのは、おそらく「心にぽっかり空いた超越性への希求」がキリスト教に向かった人が一定数いたからではないかと推測できる。作家の三浦綾子の自伝には、そのような心象が克明にえがかれている。

しかし、その後日本はキリスト教国になることはなかったし、何らかの宗教国家になることもなかった。天皇と言う「超越性の残滓」をうっすらと残しながら、日本は世界にも稀なる「真の意味で世俗的な」国となった。では敗戦によって連続性を失った「神話」は、戦後にどのような神話の形となって人々に生きる「よすが」を与えてきたのか。その答えが「経済成長」ではないかと私は考える。焼け野原から再出発した日本人は、とりあえず

「昨日より今日、今日より明日が豊かになっていく」ということを生きる「よすが」にして、世界から「日本株式会社」と揶揄されながらも奇跡の経済成長を遂げた。これは戦前の国家総動員の対象を、戦争ではなく二次産業に向けたに過ぎなかったのかもしれない。

その後経済成長は頭打ちになり、再び「超越性」または「よすが」を失った日本は混乱期に入る。1995 年のオウム真理教事件はそのような混迷のひとつの表出であった。それでも、先にも述べたように、失速しながらも惰性で生きてこられた日本人は、東日本大震災によってその生き方の転換、もしくは「何によってこれから生きて行こうとしているのか」を突きつけられる。つまり、徹底的に「超越性」「価値観」あるいは「よすが」を破壊され、中空に放り出されたような経験をしたのが 2011 年だったのである。

しかし、振り子が戻るように、2012 年末の選挙以降の日本は「経済成長の夢よ再び」とばかり「過去を取り戻す」ほうへと舵を切り戻した。さらに、近年諸外国から懸念されているように「右傾化」ともとれる排外的でナショナリスティックな言説が増加している。

このように、鈴木大拙が抱いた危機感は戦後 70 年を経て、紆余曲折の果てに、1945 年以前の日本へと先祖返りしているかの様相を呈しているのである。戦前の思想的地滑りを鈴木は経験し、それに警告を発した。しかしその状況は改善されるどころか、70 年間、日本は思想的な地滑りを右へ左へと繰り返し、もはやその地盤の脆弱性は危険な領域にまで達しているかにみえる。

地滑りを防止するには、健全な森林の育成が鍵となる。植林された根の浅い針葉樹だけでは十分な治水効果は得られず、広葉樹と針葉樹が混交した多様性の高い針広混合林が最も災害に強く、治水効果も高い。北海道富良野にある東京大学演習林の教授であった高橋清延氏はこれを「極盛相」と呼び、森は時間をかけてこの状態に収束していくと説いた。それには数百年という時間がかかるから、人手によってその「時間を早める」ことを提唱し、高橋は世界的な評価を得た。

社会における思想的な治水効果を高めることも、このアナロジーから学ぶところが大きいのではないかと私は考える。まず、植林された根の浅い木では十分ではない。接ぎ木のような方法で画一的な森林を作ろうとする試みは、強固な思想的地盤、鈴木の言う「霊性」を培うことにはならない。これは何を意味するだろうか。私たちは政府の発表する画一的な情報を鵜呑みにしてはならないし、逆に「反体制」と言われる人々の情報を鵜呑みにするのも危険である。また、「陰謀論」などにも注意する必要がある。「世界の殆どの人が知らない真実を私（たち）だけが知っている」という「気分」は、選民的意識に浸れるという意味で魅力的であるが、公開情報あるいは学問の世界で大勢が追認している立場から大

きく逸脱する言説は真実から人を遠ざける。「分かり易く強力なロジックには常に警戒しなければならない」と村上春樹は言っているが、私たちは「分かり易い平板な物語」を警戒するリテラシー（読解力、判断力）を持たねばならない。

政治哲学者ハンナ・アーレントは民主主義がその生成期の本来の物語性を失い、社会が大衆化し、個人がアトム化すると、その「よりどころの空白」を代償するような「世界観」を提示する政党が現れると指摘している。ナチスにとってその「世界観」とは優性思想であったし、戦時下の日本にとっては「大東亜共栄圏」であったかもしれない。その世界観は「論理的に緻密」である必要はない。むしろその世界観が安物であればあるほど、その論理が稚拙であればあるほど、人々はそれに熱狂する。歴史を振り返るとき、思想的ウィルスは、陳腐であればあるほど感染力が高いように見える。

私たちは一人ひとり「思想的なワクチン」を持つ必要がある。それは一言でいえば「自分の頭で考える」ということになるが、これは言うほど簡単なことではない。「空気が支配」する日本社会で、自分の頭で考え、自分で選択し、その選択の責任を、たとえ孤独な道をひとり歩む結果になっても引き受けて行く、ということは容易ならざることである。それは接ぎ木ではなく、自分で根を張って大地から養分を吸収するという覚悟を持つことである。「死後に神の前にひとり立つことになる」という、西洋キリスト教社会の前提である人生観を持たない日本社会にあって、このように生きることは「現世利益」または「功利主義」に反する。「恥なきこと」が「罪なきこと」に優先するからである。

しかし、日本社会の思想的土壌が豊かに、強いものになるためには、このような「自律的に考える個人」の増加が不可欠である。キリスト教徒に宗旨替えをすることによって自動的にそのような人間になると私は考えない。キリスト教徒であっても、他のキリスト教徒の顔色を見ながら生きたり、あるいは社会の空気に支配されつつ生きることも可能である。先の戦争中に国家に屈服した多くの日本のキリスト教会の姿を見るならば、この意味は理解されるはずである。

「西洋近代的自我」を持たない日本で、自律的に思考する生き方をどのようにして身に着けて行くかは、大きな課題である。安易な処方箋はない（この場合の「安易な処方箋」こそ、安物の世界観に他ならない）。だからと言って、匙を投げることは怠慢である。たとえば何か自分が「日本社会における少数派」であるような当事者的体験や立場を有する問題について、掘り下げて考えて行くことはひとつの訓練になり得ると私は思う。キリスト教徒ならば、すでにその少数派の当事者性を有しているのだから、それについて考えても良いかもしれない。なんらかの病気に罹患した経験、社会的な少数派のグループに属するような経験、職場や学校、地域社会や教会の中で多数派派閥からはみ出した経験、そのよ

うな経験は宝である。そこから「強い根」を張る契機が生まれるからである。

治水効果の高い森林のもうひとつの特徴は「多様性」である。針葉樹と広葉樹が混交し、そこに住む植物、動物、昆虫、菌類、微生物の多様性が高くなったとき、その森は「極盛相」という理想的な状態になり、治水効果も高まると高橋は言ったが、「思想的治水効果」にも同じことが言えるのではないか。

思想は多様であるべきである、と私は考える。百花繚乱の無秩序状態のことを言っているのではない。多様な思想が許容される寛容性こそ、その社会の健全さの指標である、という意味である。ジャーナリストの池上彰氏は「その国の新聞を読んだとき、政府に対する批判がどれだけ含まれているか」がその国が民主的であるかどうかの指標となると言っている。独裁国家の新聞には、政府批判は掲載されない。昨今の日本の報道の在り方を見ていると多少心許ない。戦時中のようなあからさまな言論統制は行われていないものの、「この話題を叩くと後々面倒くさそうだから」「次に政府に取材をしにくくなるから」といった理由で特定のトピックに対する批判や批評が「自主規制」の対象になる。太平洋戦争開戦前の日本の新聞の例を引くまでもなく、「空気が支配」する日本ではなおさら、このような自主規制は大いに警戒の対象とされる必要がある。

言論、思想の多様性というとき、そこには「愚行権」のようなものも含まれる。私の目には愚かな意見に見えても、その愚かな意見を言う権利は守られるべきである、ということである。フランスの思想家ヴォルテールは、「私とあなたの意見は違うが、あなたがそれを言う権利は何としても守る」と言った。このような精神こそ、特にネット社会到来後の日本の言説空間に必要である。

ネット社会には「サイバーカスケード現象」という言葉がある。それがどんな偏った意見だったとしても、ネットを検索すると、それを論理的に擁護するような書き込みが無尽蔵に見つかる。そしてそれに反対意見を持つ者たちを糾弾し、つるし上げるような言説も無尽蔵に見つかる。実社会にあった制御装置は機能せず、ある特定の意見だけがポジティブフィードバックを繰り返し、その人の脳内で異常増幅され、主張はどんどん過激かつ排他的になっていく。「ネット右翼」の一部の現象はこのサイバーカスケード現象で説明できる。「ネット左翼」（というものがあるとして）、にも同じことが言える。問題なのはその主張の内容ではなく主張の増幅のさせ方と排他性にある。

しかし、これは日本の思想的土壌にとって資するところがなく、多様性にとっては危機である。ヴォルテールが言ったように、「私とあなたの意見は違うが、あなたがそれを言う権利は守る」という態度を持つならば、自分と反対の意見を持つ個人や集団の「内在的論

理」を知ろうとするはずである。その中にはおそらく、「願い」は同じだが「前提」が違うだけ、というような理路もあるはずだし、前提を共有しているが意見そのものが違う、という場合もあるだろう。相手の論理の背後にある極めて人間的な感情が分かり、結論は受け入れ難いが、その感情については理解できる、ということもあるだろう。そのように互いの意見が干渉したり影響したりしながら、多様な「生態系」のようなものを作り出していくことが、鈴木の言う「日本的霊性」を涵養し、深めて行くことにつながるのではないかと思う。今の日本の言説空間はさながら、(特にインターネット上において顕著であるが)それぞれ個別に鉢植えされた植物同士が、他の植物を鉢ごと破壊し合っているような様相を呈しており、これは健全な状態とは言えない。

最後に私が 6 年前に経験した話を紹介する。当時私の弟は米国のプリンストン大学で博士号を取るために勉強しており、その卒業式に参加しに渡米したときの話である。弟の英語の家庭教師は米国の元エリート官僚であり、今はリタイアして若い学生を育てることを生き甲斐として、ボランティアで英語を教えてくれていた。弟と、母と、私の三人で彼の家に御礼を言いに行ったときのこと、ひょんなことから戦争の話になった。会話の詳細は覚えていないが、憲法 9 条の話になった。日本の平和憲法を、当時の私は守るべきであって、戦争は絶対悪だと思う、という主張をした。彼は多くの米国人がそうであるように、そのようには考えておらず、戦後の日本はアメリカの防衛の傘の下、自国の国防に傾けるべきエネルギーを経済発展に 100%注ぐことが出来たため異例の発展を成し遂げた。だが状況は変った。そろそろ自国の軍隊を持つべきではないか、というような内容のことを言ったように思う。とにかく、彼と私では意見が別れた。

私は「多くの米国人は広島と長崎の原爆がなかったら、本土決戦でもっと多くの命が失われていたのだから、あれは合理的な判断だった、と言うが、同意できない。あなたは広島に行ったことがあるか。被爆した人の話を聞いたことがあるか。何万と言う人が、一瞬で、『溶けた』のだ。それがどんなことか想像できるか。戦争は絶対悪だと僕は思う。」と言った。

結局、話は平行線だったが、私たちが彼の家を去ろうとするとき、彼が私を呼び止めてこう言った。「Stick to what you said.（その意見を大切にしなさい)」

その言葉は、ずっしりと響いた。何故か。それが「メタ意見」だったからだ。彼は私たちが語っている「対象」については語らなかった。意見が違うという事を確認したのに、もうこれ以上かき回す必要はない。彼が指摘したことは、「私と違う意見を持つ人がいるということの大切さ」であった。

キリスト教国は一神教だから排他的で、多神教の国は寛容だ、と言う論には人気があるが私は一概には同意できない。キリスト教国にも寛容を知る人がおり、多神教の国にも排他的な人がいる。キリスト教的寛容はたとえば、「人がもし、何かを知っていると思ったら、その人はまだ知らなければならないほどのことも知ってはいないのです。（Ｉコリント 8:2）」などの聖書の言葉を内面化するところから来る。つまり、「全知の神」を想定するゆえの、「原理的に不可避な自らの無知性」と、それを補うはずの他者の存在（たとえ自分と意見が違っても）を認める「教養」を持つか否かにかかっている。

私たちの暮らす社会が再び思想的な土砂災害に巻き込まれぬよう、根を張り、根を張らせあう関係と、その作法を私たちは学んでいかねばならない。

2015 年 6 月恵日
東京都練馬区の自宅にて